



報告



平成 18 年度論文賞の 受賞論文紹介

編集にあたって

平田 圭二

論文賞委員会選考委員長

NTT コミュニケーション科学基礎研究所

平成 18 年度論文賞の受賞論文紹介

毎年 5 月、総会場で論文賞が発表される。論文賞をとるくらいだから、きっと新規性、有用性に優れた内容的に高度な論文というだけでなく、今の学術分野の方向性を最も具体的に象徴しているのであろう。論文の中身に興味は湧くものの、自分とは異なる分野であるし、タイトルを見るととても理解できそうにない。中にはそんな風を感じる会員の方がおられるのではないと思う。そのような受賞論文を会員の皆様にもっと身近に感じていただくために、今年より、著者自身に受賞論文の解説や研究に関連するお話を披露していただく運びとなった。

本会では、大学等の教育や研究の現場におられる方々に対して、ハードウェア産業やソフトウェア産業の現場に従事しておられる方々を実務家と呼びしているが、実務家の会員の方々はこれまで学術論文というものをもっと身近に感じていただく機会が少なかったのではないと思う。しかし、受賞論文 9 編の著者の方々による各記事を通読すると、著者の方々がただ無心に研究に没頭する様子や研究を楽しむ気持ちが伝わってくるようであり、論文賞を獲得するような研究も、実は数々の人間味溢れるドラマの上に成り立っていたことを実感する。本記事が、これまで論文に触れる機会の多くなかった実務家の方々にとって、論文を身近に感じて、まずは手にしてみるという機会になれば幸いである。

論文賞を受賞された著者および関係者の方々が、優れた見識や経験のもとで研究を遂行し論文を執筆されたことは、紛れもない事実であろう。そして、その論文賞の

選定にあたっては、数多くの査読者、編集委員、論文賞審査委員の方々の見識や経験も加わっていることを再確認しておきたい。この意味において、論文賞は我々が今まさに所属している学術コミュニティを映す鑑の 1 つではないかと思える。本記事には、受賞論文を通して会員各位がお互いに情報処理という分野のこれからを考える機会と捉えていただきたいという意図も込められている。

平成 18 年度論文賞の選定手続きを簡単に報告する。今回、選考対象となった論文は、平成 17 年 10 月から平成 18 年 9 月までの間に論文誌ジャーナルと論文誌トランザクションに掲載された全 555 編である。その中から、公正かつ透明な審査を経て 9 編の論文を選出した。まず第 1 回目論文賞委員会(平成 18 年 9 月 14 日開催)にて、論文賞の選考基準に関する意識合わせ、昨年度論文賞委員会からの申し送り事項の検討、論文賞を授与する論文数に関する議論、選考スケジュールの確認を行った。その後、査読者からの推薦、学会委員からの推薦、一般からの推薦などを受け付け、第 2 回委員会(平成 19 年 2 月 1 日開催)にて、推薦論文を中心に候補論文を 38 編に絞り込んだ。第 3 回委員会(同年 3 月 1 日開催)にて最終的に 9 編に決定した。

末筆になりましたが、今回論文賞を受賞された著者の皆様、大変おめでとうございます。今後ともよりよい研究と優れた論文を執筆し続けていかれることを期待しております。

(平成 19 年 6 月 10 日)